国府台女子学院小学部　　2024.1.9

仏教通信「お正月について」　1月

日本の伝統的な正月飾りに「門松」があります。門松は、一年の幸福や長寿を願うもので、松・竹・梅という縁起が良く、おめでたいといわれる素材で製作されています。松は冬でも青い葉を茂らせ樹齢も長いところから「長寿」をあらわし、竹は成長が早く新芽がどんどん生えてくることから「繁栄」、梅は寒さに耐えて春に咲くため「喜び」の象徴とされています。

そのようにおめでたい門松が、「頓智」で有名な一休禅師が詠んだとされる詩歌に出てきます。それは、「門松は冥土の旅の一里塚　めでたくもあり　めでたくもなし」という詩歌で、意訳すると「正月に飾る門松は、あの世に近づいていることを知らせる道標であり、正月はおめでたい日でありながらも、めでたくもない」となります。その歌意は、お正月だからといって、「おめでたい」「縁起が良い」ことばかりにとらわれるのではなく、「生者必滅(いのちある者は、必ず終わりが来る)」を自覚する大切な日であると示してくれているのです。

また、一休禅師は「阿弥陀仏　南（皆身）にあるを知らずして　西を願ふは　はかりなりけり」という詩歌も詠んだといわれています。それは、「阿弥陀仏は、みんなの心の中におられるのに、遠い西にあると信じて極楽浄土を拝んでいるのは、もうすでに救われていることに気付いていないのだなぁ」という意訳になります。一休禅師は、「遠い西方極楽浄土に、阿弥陀さまは動かず鎮座しているのではなく、いのちあるものに常に寄り添っており、すでに私たちの心身(こころや身体)の中に宿っているのだよ」と教えているのです。それは、童話『青い鳥』のように、幸せ(大切なもの)は遠くにあるのではなく、すぐ近くにあるのに、私たちは、欲望にとらわれてしまい、身近にある「幸せ」や「平和」を自ら放棄して破壊してしまうことがあるのです。お釈迦様は、その愚かな考えや行為に、人々が気付くように2500年前から教えを伝えてくれています。

＜一休宗純禅師＞

仏教の教えは、「幸福」や「喜び」の対極に「不幸」や「悲しみ」があるのではなく、私の人生には「喜び」と「悲しみ」、「生」と「死」どちらも含まれていることに「気付きなさい」と語りかけ、私たちに寄り添って励ましてくれているのだと、改めて感じました。

能登半島地震にて被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。合掌

小学部礼拝委員会